

学位論文題名

地域における医療系大学図書館の 医療情報提供機能に関する研究

学位論文内容の要旨

【研究目的と課題】

本論文の目的は、大学—地域連携が発展する今日において、医療系大学図書館の地域連携のあり方について考察するとともに、医療系大学図書館と地域の連携の実践的モデルを構築することである。

これまで、大学図書館は学内の教職員や学生を対象にして教育・研究の支援を行ってきたが、大学の第3の機能として社会貢献が求められるようになり、図書館にも地域連携が求められるようになった。医療社会においても「患者中心の医療」が求められ、インフォームド・コンセント、科学的根拠に基づいた医療（Evidence Based Medicine：EBM）、セカンドオピニオン等、医療従事者の必要とする情報は高度化している。また臨床現場ではチーム医療が言われコメディカルも情報を必要としており、地域医療従事者に対する医療情報提供が重要な課題となっている。医療情報を必要とするのは医療従事者に限らない。地域住民においても医療・健康情報等に関わる専門的な情報ニーズが高まっている。

本論文では、医療法の改正により薬局が医療情報提供機関として位置付けられ、臨床薬剤師養成のため6年制教育が2006年から開始された薬剤師と、少子高齢化社会において保健制度の改正に伴い、地域における役割が拡大した保健師を地域医療従事者として対象に加えた。

医療系大学図書館が地域社会に対して果たす医療情報提供機能を、医療従事者に対する医療関係専門情報と、地域住民に対する健康・医療情報という、二つの視点を重視する。そこで薬剤師・保健師を中心とした医療従事者の情報ニーズと、情報提供を行う医療系大学図書館の果たすべき役割について考察する。また、医療系大学図書館のサービスに大きな影響を与える図書館員の知識・スキルの現状を図書館員の雇用形態別に調査し、継続教育について医療系大学図書館員の職能団体の役割について分析する。以上を踏まえて、大学地域連携における医療系大学図書館の今後のあり方について考察した。

以上の研究の目的に沿って、以下の5つの課題を設定した。

- 1) 医療系大学図書館と地域との関わりについて、医療系大学図書館の役割について考察する。
- 2) 地域住民に対する医療系大学図書館の専門的情報提供サービスのあり方について探る。医療系大学図書館が公共図書館と連携し、地域住民に対し情報提供を行うことについての利点と問題点を明らかにすると共に、医療系大学図書館の機能および役割の拡大につながることにについて考察する。
- 3) 臨床現場における医療従事者の情報環境と情報ニーズを把握すると共に、情報の入手方法、また、情報入手を行う際に障壁となる問題点と、医療系大学図書館におけるサービスの現状との関わりにおける問題点について解明する。
- 4) 医療系大学図書館員の医療情報サービスに対する意識と、医療系大学図書館員の現状の継続教育のあり方について探ると共に、図書館の業務外注化及び、正規職員、非正規職員の専

門的な知識、技術習得方策の問題点を含む、現状の課題を明らかにする。

5) 1) から4) の課題を踏まえて、医療系大学図書館の今後の地域連携のあり方と、そのモデルを構築することを、本論文の研究課題とする。

〔研究方法〕

研究方法は、以下のような方法を用いた。

1) 地域住民に対する医療情報提供サービスのあり方については、筆者自身が企画した、医療系大学図書館と地域との連携に基づく、実践的なプログラムを通じて課題を分析した。

2) 医療従事者（薬剤師、保健師）に対する医療情報ニーズと情報へのアクセスおよび医療系大学図書館への期待に関わるアンケート調査を実施した。また、修士論文で調査した医師、歯科医師、看護師のデータの再分析を行い、各職種の共通点と特徴と医療系大学図書館との関わりについて探った。

3) 医療系大学図書館員を対象に、医療情報サービスに対する意識及び問題点について調査し、図書館職員を正規職員と非正規職員に分け、専門知識・技術の現状と、その習得上の問題点を探った。また、医療従事者と図書館員への調査から、両者の意識・満足度について比較した。さらに、医療系大学図書館員の職能団体である特定非営利活動法人日本医学図書館協会と日本薬学図書館協議会の協議に自ら参加し、検討してきた課題について分析した。以上のことから、次のようなことが明らかになった。

〔研究の成果〕

まず、第1章では、本論文の研究課題とそれにかかわる先行研究について、考察を行った。

第2章では、米国の先進例にみられる地域連携は、わが国では緒についたばかりであり、臨床現場の医療従事者および地域住民への医療・健康情報サービスは十分ではなかった。大学における図書館の位置付けを確立し、医療系大学図書館と関連団体との連携を推進させ、サービスの改善をはかることが重要であることが明らかになった。

第3章では、北海道医療大学と、大学のある当別町教育委員会との間で行なった地域住民への医療・健康情報提供の実践活動の分析と、道立図書館との協定を通して、公共図書館との連携による住民の図書貸出、情報提供サービス、及び健康情報講座の開催結果を踏まえ、それらは地域住民が求める医療・健康情報ニーズに応じており、地域連携の発展にとって有用であることが明らかになった。

第4章では、医療従事者（医師、歯科医師、薬剤師、看護師、保健師）の各々の情報環境および情報ニーズと医療系大学図書館を含む情報へのアクセスの現状と課題について調査分析を行なった。その結果、職種により情報探索行動やニーズに大きな格差があったが、共通点は情報環境における入手情報に対する満足度が低く、信頼性の高い情報源となる文献情報データベース（MEDLINE、医学中央雑誌等）にアクセスすることが日常の習慣となっていないこと、さらに検索のための知識・技術の習得が不十分であることが明らかになった。また、医療系大学図書館に対する不満が多かった。医療系大学図書館に期待することは文献複写サービスとデータベース講習会の開催であった。職種別では、薬剤師の主な情報入手先は製薬企業の担当者でありバイアスのかかった情報であることへの懸念を抱えているが、自ら情報を入手するための積極的行動はまだ少ない。保健師の多くは、住民の健康に対する関心度が高まっていることを認識しているが、それに応じるための情報の量や質に対して不十分であると感じていた。看護師では、情報環境の整備が遅れており、改善を図る必要があることが明らかになった。

第5章では、医療系大学図書館員を対象とする調査結果から、知識・スキルは十分ではなく、継続教育の必要性が示唆された。その際、正規職員、非正規職員の区別なく、医療情報を提供する情報専門職として専門性を高めるために研修の機会を提供することが必要であると考えられた。医療系大学図書館員と医療従事者の両者の調査から、地域の医療従事者と医療系大学図書館員の間には、情報サービスにおける意識のギャップがあることが明らかになった。

今後は、医療系大学図書館と医療職の職能団体との連携、また公共図書館との連携による医療情報提供のあり方について検討することが必要となる。以上を踏まえて、地域医療従事者と

地域住民へ向けた医療・健康情報提供の重要性を示し、医療系大学図書館と医療従事者の専門職能団体との「地域の医療従事者の情報ネットワークモデル」と、公共図書館等の関連組織団体との連携を核とする「広域型医療系大学図書館モデル」の構築を提示した。 以上

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 町 井 輝 久

副 査 教 授 姉 崎 洋 一

副 査 名 誉 教 授 阿 部 和 厚 (北海道大学名誉教授・
北海道医療大学教授)

副 査 名 誉 教 授 高 山 正 也 (慶應義塾大学名誉教授・
独立行政法人国立公文書館理事)

学 位 論 文 題 名

地域における医療系大学図書館の 医療情報提供機能に関する研究

本論文の目的は、大学—地域連携という今日的課題のもとで、医療系大学図書館が地域の医療専門情報の拠点としての役割を果たすための大学図書館の役割とそのあり方について考察したものである。

本研究論文の大きな特徴は、医療系大学図書館に日々司書として働く学位論文請求者が、自らが企画者として関わった地域連携の実践の検証と医療等の専門情報ニーズが拡大している医療従事者及びその情報サービスの担い手としての図書館職員への詳細な調査をもとに、地域と連携する大学図書館のあり方について、解決すべき課題と医療系大学図書館の地域連携モデルを考察したものである。本論文は社会人大学院生博士論文の研究方法としてもモデルとなりうるものである。

本論文の目的・課題・構成は明快である。

今日社会的なニーズが高まっている大学図書館の地域連携のあり方を、地域の住民と医療専門現場で働く職業人の二つの側面から、彼らのおかれている情報環境を解明しながら、どのような専門情報を提供しうるか、そのため大学図書館がなすべきこと、図書館職員の継続教育の課題は何かは解明することを通して、医療系大学図書館の地域連携モデルとして広域型医療情報提供モデルと医療従事者情報ネットワークモデル及び住民等への情報提供・活用プログラムを提示したことである。本研究によって得られた生涯学習論、図書館学、高等教育論の分野における諸研究成果は 以下のように概略することができる。

第1に、地域住民への情報提供と医療系大学図書館の役割では、大学が連携している当別町において行った活動の一環として、「いのちの図書」の活動を図書館が展開することにより、小学生から成人に至る学習支援活動に寄与するとともに、「敷居が高い」と思われていた市民の大学図書館利用のあり方について展望を示し、また道立図書館との協定によ

る広域情報提供ネットワークのモデル化、および学部との連携により大学図書館が関わる健康医療系生涯学習プログラムを提示するなど、実践活動の分析にもとづいた成果が見られることである。

第2に、医療専門職に対する情報ニーズと図書館のあり方では、代表的な5つの医療専門職に対する詳細な調査をおこなうことで、医療・福祉等の分野の環境の大きな変化のもとで、医療従事者が必要される情報ニーズと情報にアプローチできる環境が多様であり職種によって大きな差異があることを明らかにした。また薬剤師のように薬害等の状況下でこれまでの製薬会社等からの一方的な情報の受容者から主体的な情報活用者へと転換が迫られる中で、医療系大学図書館の役割が大きいこと、地方の開業医の看護職に典型的な医療情報弱者に対しては看護師協会等職能団体と医療系大学図書館との連携による情報提供サービス、情報リテラシー教育が必要なことなどを明らかにしている。

他方彼らの情報ニーズが直ちには医療系大学図書館への期待には繋がっていないことも明らかにし、その情報ギャップの所在と医療系大学図書館のあり方を考察している。

第3に、このような状況下で、医療系大学図書館職員の医療情報及び地域連携に対する意識についての調査や図書館職員の配置の実態を踏まえて図書館職員のあり方と継続教育の課題を明確にしたことである。とくに近年拡大している派遣型職員については司書としての職務遂行意欲が極めて高いことを調査から明らかにし、正規職員との共通の継続教育による能力向上を進める必要性を強調している点も重要である。

第4に、以上のような実践的・実証的研究手法によって、医療系大学図書館における地域連携についていくつかの実践的なモデルを提示していることである。

まず地域連携における「知のサイクルモデル」では地域連携によって生まれる「知のサイクル」が地域住民へのサービスとしてだけでなく大学の研究教育にも寄与することを示している。また道立図書館との協定にもとづく活動を踏まえて、「公立図書館と医療系大学図書館との連携のあり方モデル」を提示、さらには「学部と図書館が連携した生涯学習プログラム」も実践にもとづく有効性が論証されている。一方医療専門職に対してはその情報ニーズ及び情報環境の多様性を踏まえて「地域の医療従事者情報ネットワーク」モデルを提示するとともに、医療系大学図書館が地域の「ヘルスサイエンス情報センター」として発展していくための実践的課題を提示している。さらに医学大学図書館協会の継続教育の実践をもとにした大学図書館職員の継続教育モデルも提示している。

そしてこれらを医療系大学図書館と地域連携のあり方として総合化した、「広域医療情報提供モデル」を提案している。

これらのモデルの一つ一つは今後更なる検証を必要とするものではあるが、実践的研究と実証研究に裏付けられた発展性の高いオリジナルな研究として高く評価できる。

実践検証型研究の問題点としては研究の一般性があげられるが、本論文においても特定の大学図書館と特定の地域という条件の中での実践分析の一般性が問題になる。しかし筆者はアメリカの大学図書館と地域との連携についての先行研究や、わが国における先行事例および日本医学図書館協会等の議論の検討を踏まえて、本研究のもつ位置づけを明らかにしている。

本論文は生涯学習論の視点から大学図書館と地域との連携のあり方を探求したものでありその研究成果は研究の新しい分野を切り開くことに貢献するだけでなく大学図書館のこれからのあり方と関わった実践的研究として高く評価されるものである。同時に本研究は

わが国の図書館学研究にも貢献するものであることが、審査委員会の一致した見解となった。以上のことから、本論文は北海道大学博士（教育学）の学位授与にふさわしいことを、本審査委員会は全員一致して判断した。